

大阪銀行集会所編〔明治23年〜昭和17年刊〕

大阪銀行通信録

全174巻・別冊1

【明治期】 全60巻〔第1巻〜第60巻〕

作道洋太郎・岡田和喜・高嶋雅明・本間靖夫 監修・解説
B5判・上製・総25、170頁 揃定価960、000円

91年5月〜95年1月配本完結〔復刻版〕

【大正期】 全55巻〔第61巻〜第115巻〕

作道洋太郎・岡田和喜・高嶋雅明・本間靖夫 監修・解説
B5判・上製・総29、798頁 揃定価990、000円

95年5月〜98年9月配本完結〔復刻版〕

【昭和期】 全59巻〔第116巻〜第174巻〕・別冊1

別冊Ⅱ解説・総目次
作道洋太郎・岡田和喜・高嶋雅明・本間靖夫 監修・解説
B5判・上製・総34、914頁 揃定価1、140、000円

99年1月〜02年9月配本完結〔復刻版〕

『大阪銀行通信録（前身誌『銀行報告誌』を含む）は、全国的視野にたつ金融経済の状況をもとに、特に大阪金融市場を中心とする関西の諸地域、及び西日本各地の金融経済の動向を把握できる第一級の資料である。東京の『銀行通信録』、名古屋の『中央銀行会通信録』と共に、日本金融史研究に不可欠の三大重要資料であり、大学等の研究機関のみならず、金融業界等の経済界においても広く活用できる内容を備えている。

●推薦Ⅱ宮本又次・長 幸男・安岡重明・大浦克彦

中央銀行会刊〔明治36年〜昭和17年刊〕

中央銀行会通信録

全130巻・別冊1

【明治期】 全25巻〔第1巻〜第25巻〕

岡田和喜 監修・解説〔第25巻に解説収録〕
B5判・上製・函入・総10、368頁 揃定価375、000円（配本毎75、000円）

89年5月〜90年5月配本完結〔復刻版〕

【大正期】 全56巻〔第26巻〜第81巻〕

岡田和喜 監修・解説〔第81巻に解説収録〕
B5判・上製・総26、000頁 揃定価750、000円（配本毎75、000円）

90年8月〜92年11月配本完結〔復刻版〕

【昭和期】 全49巻〔第82巻〜第130巻〕

岡田和喜 監修・解説〔第130巻に解説収録〕
B5判・上製・総23、000頁 揃定価900、000円（配本毎75、000円）

93年2月〜95年11月配本完結〔復刻版〕

『中央銀行会通信録』解題・記事総索引

岡田和喜 編・著／B5判・上製・総625頁
定価25、000円／98年1月刊

戦前期の三大銀行業界誌『銀行通信録』（東京）、『大阪銀行通信録』と並ぶ『中央銀行会通信録』は、中京地帯（静岡・福井・岐阜・三重を含む）の銀行や金融市場の状況ばかりでなく、中部経済の動きについても多くの情報を与えており、この時代における中部経済に接近する資料として大きな価値をもっている。経済動向を月報形式で示す本通信録は、近代日本経済の史的研究に不可欠であり、貴重な資料である。

●推薦Ⅱ石井寛治・岡田和喜・新保 博・杉原四郎

金融雑誌

の展開

岡田和喜

おかだかずのぶ

戦前の銀行業界誌である金融雑誌『銀行通信録』

（東京）、『中央銀行会通信録』（名古屋）、『大阪銀行通信録』は、近代日本経済、金融の史的研究に不可欠の第一級資料である。これらの復刻、解題に永年携わってきた著者による、金融雑誌研究の集大成。『大阪銀行通信録』の復刻解題に係わる論稿を中心に、『銀行通信録』解題、銀行業界誌を統合した『全国金融統制会報』の解題を収録。『大阪銀行通信録』の編集、刊行の成り立ちを解明し、わが国の金融雑誌の歩みを探る。

●表示はすべて税別

A5判・上製・総247ページ

本体4、800円＋税

2011年12月刊行

ISBN978-4-8350-7079-7

不二出版

不二出版

〒113-0023
東京都文京区向丘1-2-12
電話03-3812-4433
ファクシミリ03-3812-4464
振替00160-2-94084

戦前期における大阪金融市場の 独自性の究明へ

石井寛治（東京大学名誉教授）

第二次大戦前のアジアで日本のみが近代的工業化に成功したという場合、それを牽引したのは大阪を中心とする綿工業であった。大阪は東洋のマンチェスターと言われ、紡織業者は中国にも続々と工場（在華紡）を作っただけでなく、世界綿布市場においてイギリスを上回るシェアを獲得した。戦前期の近畿地方の工業は関東地方のそれを引き離して発展したが、それを資金面で支えたものが大阪を中心とする諸銀行の金融であった。もちろん株式・社債の発行・流通も盛んになったが、投資家の資金繰りは銀行の株式担保金融に頼っていた。大阪金融市場の活動は、銀行の営業報告や大蔵省の金融統計などを使って分析され、東京金融市場に較べて商業手形の割引という先進的な機能が強いとされてきたが、どこまでそうなのか十分には明らかでない。諸銀行の活動を本支店レベルにまで下りて分析するには『大阪銀行通信録』が貴重なデータを提供してくれるし、銀行員の動静や彼らの活動の法律的・経済的問題点についても詳細な情報を与えてくれる。著者の岡田氏は、銀行史の優れた研究者であると同時に、『銀行通信録』『中央銀行会通信録』などを含む金融雑誌の書誌学的研究における第一人者であり、本書を通じて読者は、著者と故作道洋太郎氏の監修によって不二出版から復刻された『大阪銀行通信録』がどのような雑誌であり、いかに利用できるかについて正確で豊富な知識を得ることができよう。

まえがき

本書は、『大阪銀行通信録』の復刻問題に係わる論議を中心とした。一九八〇年代に、『銀行通信録』の復刻に際して問題を依頼された。つづいて『中央銀行会通信録』『大阪銀行通信録』『全国金融統制会報』『銀行集会所新報』と、戦前の銀行業界誌である金融雑誌の復刻監修と、解題の執筆に携わった。

これら各誌はたんなる銀行業界誌、あるいは金融雑誌にとどまるものではなく、何れも日本金融史研究に欠かせぬ内外金融資料の宝庫でもある。加えて各誌とも地域的資料をこまかく編集し、定期的継続的に刊行を維持して来たから、資料的意義は計りしれない。そこで復刻、解題にさいして、各誌の成立ちにとどまらず、歴史的・地域的課題を明らかにし、かつ資料内容の精査につとめた。また未熟ながら私の年来の地方銀行、地方金融市場の研究を基礎に、金融雑誌の研究とともに、『中央銀行会通信録』解題・記事索引刊（不二出版、一九九八年、『銀行通信録』については、『銀行通信録他解題』日本経済評論社、一九九一年）として、すでに刊行してある。本書は、杉原四郎編『日本経済雑誌の源流』（有斐閣、一九九〇年）に収められた『金融雑誌』の前期を第一章とし、『大阪銀行通信録』の解題を中心に編集した。また大正期の『大阪銀行通信録』の解題を補うために『銀行通信録』の解題をいれた。最終の第七章は銀行業界誌を統合した『全国金融統制会報』の解題である。これによって、本書では『大阪銀行通信録』の編集、刊行の解明にとどまらず、わが国の金融雑誌の歩みを些少ながら

まえがき

本書は、『大阪銀行通信録』の復刻問題に係わる論議を中心とした。一九八〇年代に、『銀行通信録』の復刻に際して問題を依頼された。つづいて『中央銀行会通信録』『大阪銀行通信録』『全国金融統制会報』『銀行集会所新報』と、戦前の銀行業界誌である金融雑誌の復刻監修と、解題の執筆に携わった。

内容見本

67 第3章 第一次大戦期の『銀行通信録』

表7 経済文庫所蔵文献数

	和書		洋書		計		国内雑誌		海外雑誌	
	部数	冊数	部数	冊数	部数	冊数	部数	冊数	部数	冊数
1912上	1,587	3,602	1,566	2,041	3,153	5,643	76	1,428	36	655
下	1,615	3,682	1,628	2,114	3,243	5,796	76	1,477	36	688
1913上	1,674	3,795	1,689	2,189	3,363	5,984	76	1,506	37	708
下	1,719	3,868	1,743	2,245	3,462	6,113	76	1,528	37	749
1914上	1,781	3,999	1,822	2,337	3,603	6,336	76	1,550	37	787
下	1,811	4,077	1,877	2,402	3,688	6,479	78	1,643	37	826
1915上	1,859	4,173	1,934	2,478	3,793	6,651	78	1,695	37	869
下	1,890	4,288	2,041	2,601	3,931	6,889	78	1,734	37	901
1916上	1,925	4,379	2,081	2,652	4,006	7,031	78	1,759	37	901
下	1,980	4,459	2,090	2,677	4,070	7,136	83	1,779	38	925
1917上	2,045	4,543	2,126	2,716	4,171	7,259				
下	2,032	4,680	2,135	2,734	4,167	7,414				
1918上	2,115	4,874	2,211	2,813	4,326	7,687	70	1,685	39	814
下	2,191	5,088	2,284	2,888	4,475	7,976	70	1,801	39	863
1919上	2,295	5,213	2,342	2,946	4,637	8,159	70	1,827	39	863
下	2,412	5,330	2,402	3,023	4,814	8,353	70	1,899	39	863
1920上	2,511	5,433	2,442	3,064	4,953	8,498	70	1,899	39	968
下	2,554	5,526	2,502	3,130	5,056	8,656	70	1,931	39	968
1921上	2,604	5,628	2,559	3,312	5,163	8,840	71	1,984	39	1,007
下	2,685	5,777	2,613	3,278	5,298	9,055	71	1,984	39	1,010
1922上	2,754	5,906	2,717	3,403	5,471	9,309	72	2,028	39	1,030
下	2,862	6,108	2,827	3,519	5,689	9,627	72	2,060	39	1,053
1923上	2,932	6,244	2,903	3,598	5,835	9,842	74	2,136	39	1,115
下	2,694	6,326	2,925	3,621	5,869	9,947	74	2,136	39	1,115
1924上	3,041	6,452	2,949	3,659	5,990	10,111	74	2,136	39	1,115
下	3,152	6,660	2,986	3,717	6,138	10,377	74	2,240	39	1,115

(1) 1917年上、下期は、保管図書整理中のため、購入、寄贈雑誌は受入を中止。1918年上期より整理完了により受入を開始。
(2) 『東京銀行集会所第64-87期報告』『日本金融史資料 明治大正編』第12巻（1959年、大蔵省印刷局）所収による。

目次

- 第1章 金融雑誌の展開
 - 1. 金融雑誌の創刊の概況
 - 2. 発行所別金融雑誌の刊行状況
- 第2章 信用秩序の維持と『大阪銀行通信録』
 - 1. 経済雑誌としての『大阪銀行通信録』
 - 2. 『大阪銀行通信録』の創刊と編集
- 第3章 第一次大戦期の『銀行通信録』
 - 1. 大正期の経済雑誌と『銀行通信録』
 - 2. 『銀行通信録』の刊行と東京銀行集会所
 - 3. 『銀行通信録』の編集構成
- 第4章 大正期の『大阪銀行通信録』と金融市場
 - 1. 経済雑誌の発展と『大阪銀行通信録』
 - 2. 大正期の『大阪銀行通信録』
 - 3. 金融市場の発展と『金融概観』「手形交換成績」
 - 4. 金融市場と『大阪銀行通信録』
- 第5章 金融恐慌と『大阪銀行通信録』
 - 1. 金融恐慌の報道と『大阪銀行通信録』
 - 2. 昭和期の『大阪銀行通信録』の編集
 - 3. 金融恐慌と『大阪銀行通信録』
 - 4. 『大阪銀行通信録』と銀行業務の改善
- 第6章 実業雑誌としての『大阪銀行通信録』
 - 1. 『銀行実務』と『大阪銀行通信録』
 - 2. 『銀行実務懸賞答案』の募集と『大阪銀行通信録』
 - 3. 『銀行通信録』と経済文庫の創設・講演会の企画
 - 4. 実業雑誌としての『大阪銀行通信録』
- 第7章 全国金融統制会と『全国金融統制会報』
 - 1. 『全国金融統制会報』の創刊
 - 2. 『全国金融統制会報』の編集

3. 『銀行通信録』の編集構成

『銀行通信録』の編集は、その誌面構成でみるかぎり、明治末年までにほぼ確定し、大正期以後、ほとんど変更されていない。第一次大戦期を前後とする時期の誌面の構成を、表8『銀行通信録』編集構成からみてみよう。

まず巻頭稿は、各巻一月号にのみ掲載されることとなっている。巻頭稿は、明治期以来の金融界の指導者であり、かつ大御所であった渋沢栄一をはじめ、大蔵大臣、日本銀行総裁など、金融制度の中心に座する人々によっていた。ここらみに一九一